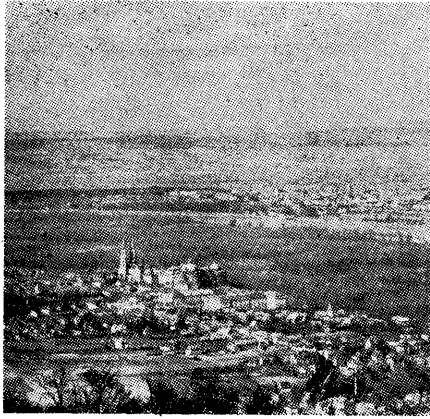


ヨーロッパの旅

ウィーン

平井信義



青きダニュープの流れ。
ウィーンのことばではドナウ河となる。

ウィーンを訪れてから、もう二年半になる。しかし、その思い出は色褪せるどころか、今になってかえって鮮明に細かい部分まで私の眼底に蘇ってくる。

汽車でミュンヘンから独逸国境を超えてウィーンに着いたのが三月六日の朝。窓外には斑目まだらになっ

た雪が畑地や北向きの屋根に残っていた。ミュンヘンで吹雪に近い一日を送ったが、恐らくその日にこのウィーンも雪が降ったのであろう。駅に降り立つと、なお首筋に冷たく、風が吹き入って来た。友人の山田事務官が迎えに出てくれるはずになっていたが、改札を出て荷物をかかえて立っている私の前には、彼の姿が見えなかった。頼り切っていただけに、私の不安は強くあちこちを見廻したが、やはり見当らなかつた。しかし、旅行中の例にならって駅の売店で地図を買った。既に人の去った駅の構内には薄日が射してくる。私は冷たい木のベンチに腰を下して地図を拡げた。ポケットにあった旅行案内記と照らし合わせながら、地図の隅々まで眺めている中に、私の心は次第に落ちついてくる。地図は私の旅行中に最も大切な友人であり案内者でもあった。それは、私が貧しかったからでもあつた。私は目的の都会につくと、必ず地図を買って駅の前に立ちほだか

ったり、食堂に腰を下して、地図を丹念に眺めることにした。パリ
の北駅についた時などは、地図を頭に入れるのに一時間以上もか
かったものである。市内の道路や乗物の系統、名所の所在の大略を
理解すると、地図を畳み、あとは最も安い交通によって、市内をあ
ちらこちらと移動するか、出来るだけ徒歩でいく工夫をする。私が
訪れた都会では、方々の町角でひとりの日本人がしばらくの間地図
を拡げては、方向を見定めると再び歩き去る姿を見ることが出来た
はずだ。ローマなどでは、そうして一日二、三十軒を歩いたことに
なり、あとから地図で道のりを計算してみても、我ながら驚いたこと
もあった。

しかし、こうして歩いたことが、あるいは市民と一しょに電車や
バスにのったことが、その土地土地の思い出を、私の脳裡に強く刻
みつけたのである。町角で見上げた破風や広告の看板の色まで、今
日もなお思い出されてくる。

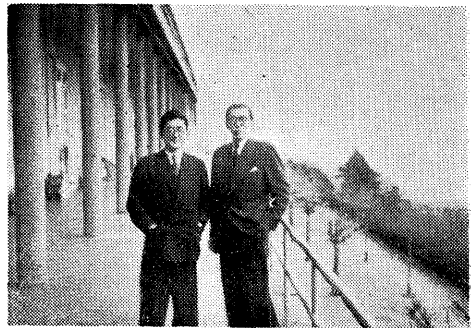
ウィーンの駅では、そのような私の姿を、間もなく山田君が見付
けてくれた。「いやいや、失敬失敬」。山田君は遅刻した理由をの
べ、私の鞆の片方を持ってくれ、私どもは駅の構内を出た。彼の運
転する自動車で既に予約してもらっていたホテルに入ったのが、朝
の八時過ぎだったろうか。私の部屋は、エレベーターで上った五階
にあった。小さいけれども小ぎれいな部屋。私はこの部屋で四日間
を過ごすことになる。私の満足した顔付きに、山田君も満足したよ
うであった。朝食をすますと、山田君の案内で、青きダニューブの

見える丘に行くことにし
た。一と先ず大使館にい
くと、ピアニストの梶原
君が来ていた。「やあ」
と二人は同時に声をかけ
合せて、固い握手をした。

梶原君とは既にフラン
クフルトで知り合ってい
た。彼はよく私の下宿を
訪れて来たし、私も彼の
下宿にいつて、彼の炊い
た飯や彼の揚げた天ぷら
に舌鼓を打ったものであ

る。ケルンに移住する時などは延々一七〇軒の道を、彼の自動車に
のせてもらった程世話になったのである。彼は、私より既に一年前
にドイツに来ていた。その間既に自分の力でリサイタルをひらいた
り、あるいはドイツ人とトリオを作ってラジオ放送にも出ていた。
そして、音楽のさかんな異国の地で他の天才音楽家に伍して自分
の力を発揮し、ゆるぎない自分の地位を築こうと努力していたのであ

る。「あと何年かかるかわからないが……」と前置して、彼はヨーロッ
パの空気をじゅうぶんに呼吸して、世界一流になりたいという野心



ウィーンの丘のレストランで山田事務官と。
時は3月、まだ春も浅い。

を語ってくれた。

日本から歐洲やアメリカに出かけていって、ただ「留学した」ということだけ看板を掲げ、日本でよい位置付けを期待している音楽家はたくさんある。音楽家のみではない。学者にも政治家にも、そのような人がほとんど大部分だといってもよい。あるいは、親善という政治的なバックボーンの上に、演奏会をして巡る音楽家がある。

親善という看板であれば、音楽は外交の道具にすぎないのであるから、どのように下手な演奏をしても一応の讃辞を受けるはずである。

梶原君はそれを極度に嫌っていた。西洋音楽の伝統を持つドイツやオーストリアを独力で駆け廻れるような演奏家でなければならぬことを力説する。こうした彼の姿を見る度に、淋しがり屋の私は、励まされ、刺激された。そして、梶原君のような性格がどのよう



梶原君の手料理に舌鼓を打つこともあった。

うにして育まれたか、また、彼のような性格の人間を作るには、子どもの時からどのような点に注意したらよいただろうかと考えた。梶原

君はひとりっ子で、早くお父さんを亡くされ、お母さんの手一つで育てられたのだそうである。

「お母さんは、君に帰国するように言われませんか？」

「一週間に一度は手紙をよこしますが、一度もそうしたことは書いていません。僕のこうした立場を信用していてくれますから……」と彼はさりげなく言った。

母ひとり子ひとりの家庭では、母親は子どもを自分の専有物とし、将来は自分の老後と結びつけて期待することが多い。しかし、こうした考えは、実は母子家庭のみではなく、日本の母親に共通な意識であり、それがたまたま母子家庭にはつきり現れてくるだけのことである。ところが、梶原君はそうした母親の意識に縛られていない。自分の力を出しきるために見定めた目標めがけて努力を始めて、それにまっしぐらに進んでいく。

「よく、才能ということが言われますが、しかし、私は努力だと思えますね。一にも努力、二にも努力……」と彼のピアノのレッスンは深更にまで及ぶということである。

この梶原君と連れ立ち、山田君の運転する自動車でダニエールの見おろせる丘へ上り始めた。

春はまだ極く浅い。木々は葉をつけず、むしろ凍えるように立ち並んでいる中を、自動車道路は山肌に沿って右へ左へとうねって続いていた。朝からの曇り日で、薄日がさしてはまた時々小雪が風に乗って舞い降りてくる。

「今度来てみて、ウィーンを見直しましたよ」と梶原君。彼は西ドイツに移住する前にしばらくこのウィーンにいたのである。

「そうそう、あなたはウィーンが嫌いでしたね」と山田君が合槌を打つ。

「見知らぬ土地であると、初めのちょっとした印象で、その土地の好悪が左右されますね。人がじろじろ見ていたとか何とか……」と私。

「僕のはそういった種類のものではないんだけど……」と梶原君が言うのを山田君が引きとって、

「梶原君のような希望があれば、それは最初は苦しい思いをするものですよ。でも、先日の演奏会の批評を新聞で読んだが、たいへん好評だったではない……」

「ありがとうございました」

二人の会話が途切れると、目の前に美しい家があらわれた。丘の上に着いたのである。我が国なら、茶店が並んでいるのであろうが、その家は大きなレストラントであった。

ロビーに帽子と外套をあずけると、山田君の案内で食堂へいった。既にボーイとは顔見知りなのであろうか、山田君には非常に親しく愛想を作るボーイたちであった。

食事が出来るまで、テラスに出た。

「うわあ、寒いな」と梶原君が首をすくめたが、山田君は

「ほら、かすんでしか見えないけれど、左手に一と筋に見えるの

が、ダニューブです。あの青きダニューブのね。

もつとも、この辺までくると、大部濁れるダニューブですが、この上流の方は美しいそうですよ。」

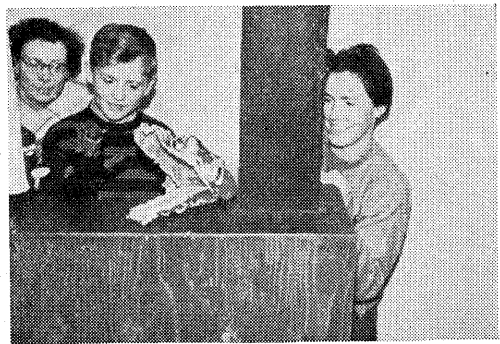
「僕もいつてみたいと思っているのですが、時間がないかなあ。実際、ヨーロッパへ来て一年半以上になるけれど、名所を訪れたのは数える程しかありませんね。」

「梶原君のように勉強する人は、これまで見たことがない」と山田君が讚める。

二人ずつ並んで私の器械で写真を撮うつした。

*

ウィーンでの日程は、毎夜オペラ・オペレッタ・ドラマを見た他、マリア・テレサの華かであった頃の王宮や教会なども、隈なく見て歩いた。あるいは、市役所の地下の食堂で、化学の実験でもするかのような装置のガラスを机の真ん中において、そこから葡萄酒を飲んだりした。



児童相談所の心理劇。カスベリを使ってやっている。



しかし、最も印象に強く焼き付いているのはシュビール教授に会ったことであり、シュビール教授の主催する実験学校を二日間にわたって見学したことである。実験学校とは我が国の付属学校に近い。実は、この実験学校を見学する計画は立ててなかったし、知らなかったのであるが、児童相談所のバウムゲルテル氏の好意が次の好意を生んだといってもよい。バウムゲルテル氏は、彼の発表した論文でその名前を知っていたが、面識はなかった。彼の研究の内容に興味を覚えたので、私は会って話をきいておこうと、今日訪問する旨の手紙を出しておいたのである。急用のために彼は不在であったが、既に通じてあったので、秘書の女の人が丁寧にそれぞれの部屋を案内しては、それぞれ遊戯療法・精神療法の専門家たちに引合わせてくれたし、最後には、「所長がおあげしてくれというので」といって、一と揃いの文献を渡してくれた。

その時に
私は大学の
精神科にノ
ヴォトニー
氏を訪ねる
ように言わ
れた。徒歩
で二十分の
距離を大学

にいくと、快くノヴォトニー氏が迎えてくれた。そして、シュビール教授に会うことと、実験学校を見るように言われたのである。「ちょうど今日、シュビール教授がここでカウンセリングをなさいますので、お引き合せをしましょう。夕方の四時からです。そして、明日でも、実験学校をごらん下さい。これは世界に誇ってもいいものです」

ノヴォトニー氏は大学の講師であつたので、忙しそうにしていたが、突然訪問した私のために時間をさいてくれたのを心から感謝した。しばらく彼の部屋で待っていると、シュビール教授が来たことを看護婦が知らせしてくれた。既にノヴォトニー氏から私のことをきいていたのであろう。笑顔で迎えてくれた。そして、カウンセリングをおこなっているのを、側できいてもよいと承諾してくれた。

ひとりの母親が入って来た。小学校一年生の男の子の親であるという。子どもの分別がないことを歎くように訴えていた。シュビール教授は、時々口をはさんでき返していたが、うなずくように母親の話をきいていた。母親が立ち去ると、赤いジャケツを着た子どもの方がシュビール教授の前へ呼ばれた。はじめはおじおじする態度が見えたが、教授から肩に手をかけられ、抱かれるようにされて、「君はよい子だねえ」というと、少年はにこにこ顔をほころばせて、自分の方から話をし始めるのであった。私には、シュビール教授の自然に打ちとけた態度が、カウンセリングの最も大切な部分であることを知った。

(次号)